六　「寒鶯春を待つ」
地下の宝庫に夢をかけた　炭鉱王　高取伊好（一八五〇～一九二七）

高取伊好（寒鶯亭所蔵）

まだ寒い城山から、みじゅくな鶯の鳴き声が聞こえてきます。きれいな案内地図板の前で、やすひろ君が、興味ぶかげに考えこんでいます。嫩坨道、嫩坨生誕地、このむずかしい漢字の「嫩坨」とは、いったい、だれのことだろう。

ここは、春の桜、秋の紅葉で美しい多久市の西渓公園前です。やすひろ君は「嫩坨」調べに挑戦することにしました。調べていると、いろいろなことがわかり、レポートにまとめてみることにしました。

嫩坨は、多久の学者・鶴田斌の別名でした。斌は、たいへん有名な儒学者で今でも嫩坨は、鶴田家周辺の地名にもなっているのです。斌には、六人の子供がいました。男の子は長男の皓、次男の庸夫、三男の伊好です。

皓は、幼いころから勉学にはげみ、すぐれた才能を発揮しました。戊辰の役に従軍した後、新政府の司法官となり日本の刑法作りに努力し、元老院議官などの大事な職にもつきました。また、刑法学者として有名です。庸夫と伊好は、ともに、炭鉱事業で名をなしますが、やすひろ君は、西渓公園の中央にある銅像が、伊好であることをつきとめ、彼について、くわしく調べることにしました。

やすひろ君が探し当てた
鶴田斌の顕彰碑（多久市多久町西の原）

伊好は、嘉永三年（一八五〇）、現在の多久市多久町西の原で生まれました。江戸時代も終わりに近く、新しい日本の夜明けをむかえようとしていたころです。

負けずぎらいで、わんぱく少年だった伊好は、いたずらが過ぎて、よく、土蔵に入れられましたが、そこでも大暴れだったようです。しかし、気持ちのたいへんやさしい、思いやりのある少年でもありました。父の斌は、そんな伊好に見どころがあると見ぬき、将来を期待していました。

西渓公園と高取伊好胸像（多久市多久町西の原）

新築の東原庠舎正門（多久市多久町東の原）

伊好は、六歳になり※邑校東原庠舎に入学しました。東原庠舎は、武士の子弟だけでなく、農民や町人などの子弟でも、学問や武芸に志しある者は、入学できるようになっていて、当時としては、めずらしく、すばらしい学校でした。伊好が入学していたころ、寄宿生が百五十人、通学生が百二十人ぐらいいたようです。この学校から多くのすぐれた人たちが出ています。志田林三郎もその一人です。

伊好は、九歳の時、姉のとつぎ先、高取大吉の養子となりました。高取家は、現在の佐賀市にあったので、そこに住むことになりました。また、十四歳の時、伊好より三歳下で多久邑主の長男・乾一郎の読書相手を命じられ、一か月の半分は、佐賀で、あとの半分は、東原庠舎に来て学ぶことになりました。

慶応三年（一八六七）、鍋島本藩が、藩内で才知にすぐれ有望な若者三十六人を選び、長崎に英学修業を命じました。伊好もその一人でした。たいへん名誉なことで、向学心にもえた若者には、勉学のすばらしいチャンスでもありました。当時の長崎

は、ヨーロッパ文化の窓口でもあったからです。伊好、十八歳の時です。

しかし、伊好は、この光栄ある長崎留学をことわりました。それには、深いわけがありました。前年、父大吉がなくなり、病弱の老いた養祖母一人を残して、長崎に行くことは、伊好にはできなかったのです。翌年、養祖母は、伊好の手厚いかんごのもとで、静かに永眠しました。

明治三年(一八七〇)六月、伊好は、乾一郎につきそって憧れの東京留学が実現しました。※三叉塾で英語を学び、翌年、慶応義塾に転学しました。ちょうど、日本が、藩を県の制度に改めるなど、新しい国づくりに取り組んでいたころです。

希望にもえて勉強する伊好

伊好は、机のへりで胸を痛めたと言われるほど、勉学にはげみ、熱中しました。そして、自分の夢を地下にねむる無限の富のみなもと「石炭」、その開発にかけることにしました。石油や原子力が、現在のように使われていなかったころです。石炭は、これから先の世の中で、新しい産業をおこすために、社会や国にとって、ぜひ、必要だと考えたからです。でも、炭鉱の仕事は、たいへん危険がともないます。

明治五年の春、伊好は、新設の官立鉱学寮という学校に入り、採炭学を修め、二年後、優秀な成績で卒業し、高島炭坑技手を命ぜられました。長崎湾内の高島炭坑は、旧鍋島藩から政府直営にかわっていました。同年十一月、参議をやめた後藤象二郎にはらいさげになり象二郎のたっての願いで、伊好は、採炭と経営を続けました。

地下深い坑内で、大惨事につながるガス爆発や浸水事故は、しばしばです。明治

寒鶯亭(多久市多久町西の原)

十一年の浸水事故の時、坑内で指揮をとっていた伊好自身も激流に流され、全身に大小三十あまりの傷をおいました。

豪快で、度量の広い伊好は、坑夫たちを愛し、また、伊好の新しい技術と人柄に坑夫たちは、安心感と、大きな信頼をよせ、出炭量はいちじるしく伸びました。

その後、独立した伊好は、経営不振の炭鉱を、次々に、立て直しました。大正七年(一九一八)、高取鉱業株式会社を設立した時は、すでに、「炭鉱王」の地位にいました。伊好は、地下の宝庫・石炭からえた利益は、いつも世の中に役立てたいと考えていました。

伊好は事業でえた利益を、次々に、教育、医療、福祉、文化、地域の振興などのために寄付し、この面でもすばらしい功績をのこしました。西渓公園や公園内の図書館、寒鶯亭も、その一つです。

やすひろ君は、調べているうちに、西渓公園の西渓は、伊好の別の呼び名であることがわかりました。また、今はなき図書館とそのなごりをとどめる赤いレンガの書庫や寒鶯亭は、当時の山村には、たいへんめずらしい文化の灯をともす施設であったことを知り、おどろきました。

伊好は、※和漢の学問を修め、欧米の科学技術を身につけ、より高い目標にむかって、困難をのりこえ、強い意志で努力する人でした。やすひろ君は、そんな伊好が大好きになりました。

山は、春になっていました。鶯が、上手な声で鳴いています。やすひろ君も、今、明日への夢と勇気で輝いています。

旧図書館の書庫(多久市多久町西の原)

伊好直筆の額「寒鶯待春」(寒鶯亭所蔵)
やすひろ君の大好きになったことば
(「寒鶯春を待つ」)